

P = 4) して SPLYZA TEAMS® 使用の有無による VSOP 評価結果を比較した。② SPLYZA TEAMS® の使用後アンケートから学生の感想を確認した。

【結果】 ① I-IV 期 vs V-VII 期 = 2.3±0.5 vs 3.2±0.6 (p<.003) と V-VII 期で点数が有意に高かった。② アンケートでは「SPLYZA TEAMS® を使用してよかった」(100%)「今後の実習・研修に活かせると思う」(92%) など好意的な意見が多かった。

【考察】 SPLYZA TEAMS® による MI・SP の教育は、実習のシーンごとに教員からのフィードバックやグループ・メンバーの動画を参考にすることで復習しやすく、他の技能学習への応用の可能性が示唆された。

8-4.

授業後に学生が記述した「性的マイノリティについて医学生が学ぶべきこと」を分析しカリキュラム改善に生かす

(八王子：リウマチ科)

○青木 昭子

(八王子：総合診療科)

山口 佳子

(医学教育分野)

原田 芳巳

【背景】 医学教育コア・カリキュラムには「ジェンダーの形成並びに性的指向及び性自認への配慮方法」が含まれているが、学修内容は各大学に任されている。東京医科大学医学科では 2014 年から「医療プロフェッショナルリズム」の中で、2 年と 4 年に LGBT に関連する内容を講義している。医学科 4 年生を対象に 2021 年度オンデマンドで実施した授業「多様性に対応できる医療を考える」の課題「LGBT や性の多様性をどのように学ぶべきか」に対する学生の記載を解析した。

【授業の内容】 トランスジェンダーの支援団体の代表も務める泌尿器科医師と内科医が性同一性障害と医療について講義した。

学生が必要と考える学修：e-自主自学に入力された 109 人の記載を解析した。(1) 望ましい学習の時期について (86 人が記載)：70 人が低学年 (1・2 年) で学ぶべきと記載し、そのうち 14 人は入学後早期に学ぶべきと記載していた。14 人が実習開始前、6

人が実習中の学修を提案し、58 人は複数回の学修を、18 人は 1~6 年まで各学年で学修するとよいと記載していた。(2) 学修の内容について：56 人が LGBT 当事者の授業参加を提案していた。具体的には「日常生活における悩みや体験を話してもらう」「グループワークに参加してもらって意見交換する」などの記載があった。当事者の参加は難しいだろうと、インターネットの動画や映画の利用や、当事者ではなく LGBT の支援者や対応している医療者の参加を提案する学生もいた。(3) 学修の方法について：正しい知識を得るための講義や当事者から話を聞く、に加え、グループワーク、医療面接などのロールプレイをするなど複数の学生がアクティブラーニングを提案していた。

【結語】 多くの学生は LGBT を学修する必要性や意義を感じ、能動的な学修を希望していた。授業の形態を工夫し、より効果的な学修を考えていきたい。

8-5.

院外心停止に対して ECPELLA で救命し社会復帰を果たした 1 例

(救急・災害医学分野)

○会田 健太、東 一成、石井 友理、
鈴木 彰二、澤島 摩那、織田 順

【背景】 心原性ショックに対して、VA ECMO (venoarterial extracorporeal membrane oxygenation) と Impella を併用する治療法 (ECPELLA) の有効性が近年報告されている。しかし、院外心停止患者に対する ECPELLA の有効性やエビデンスは未だ十分ではない。今回我々は院外心停止患者に ECPELLA を導入し救命した症例を経験したので報告する。

【臨床経過】 60 代男性。歩行中に路上で倒れた。目撃者により一次救命処置が施行された。救急隊接触時、初期波形は VF (ventricular fibrillation) であった。発症から病着までは 47 分であった。二次救命処置を施行し病着から 10 分後に自己心拍が再開した。心原性ショックの状態は持続しており、IABP (intra-aortic balloon pump) を導入後に PCI (percutaneous coronary intervention) を施行した。PCI 中に VF となり、ECPR (extracorporeal cardiopulmonary resuscitation) を施行した。VA ECMO と IABP を併用しても循環動態は破綻していた。順行性の補助循環を付加する